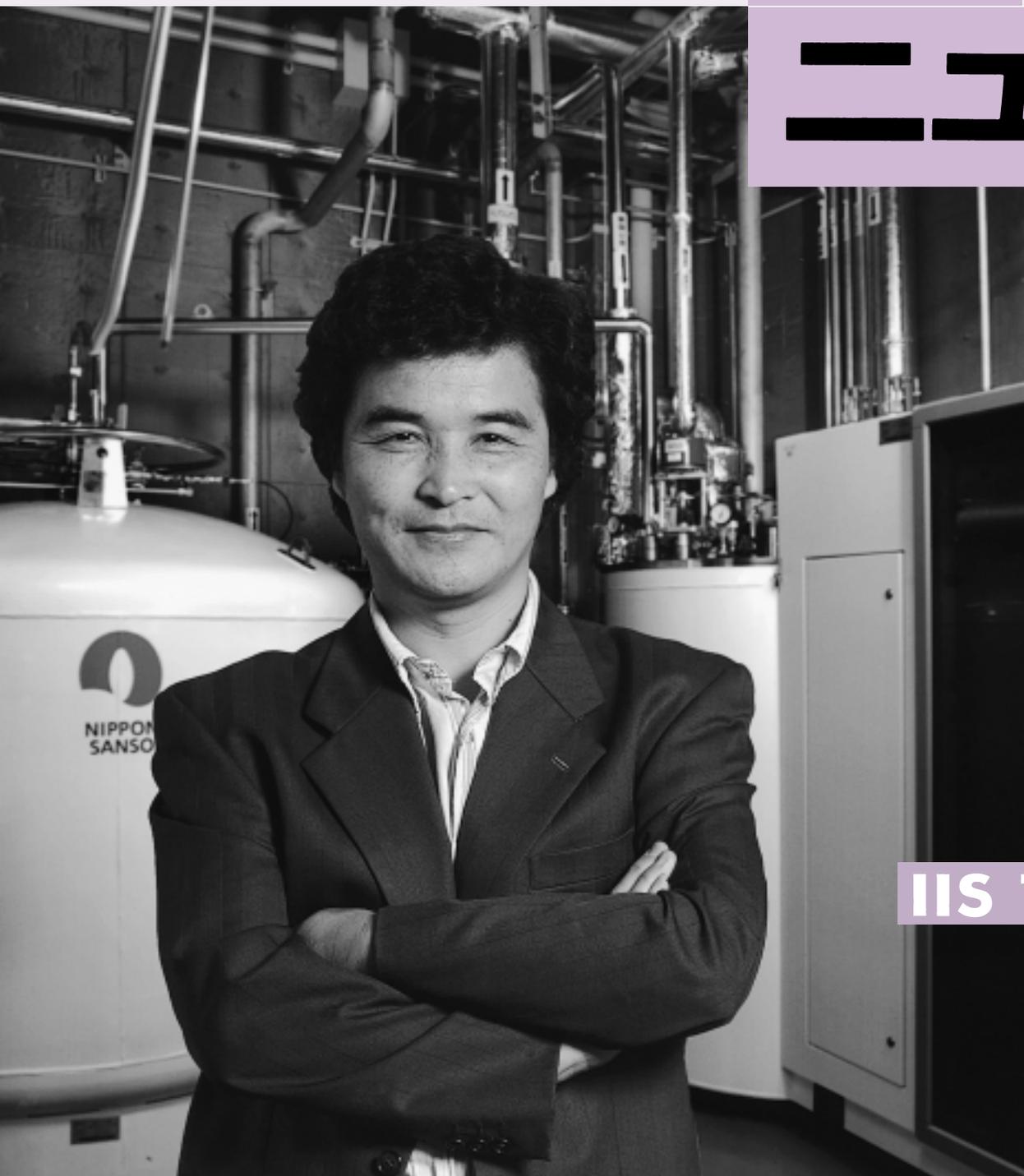


生研 ニュース

PHOTO 倉科満寿夫



2001.10.1
No.72

IIS TODAY

●流体テクノセンター
金子 和行

F棟1Fの北東端にある流体テクノセンター。その部屋にある液体ヘリウムの大きなタンクの前に立っているのが、その唯一のスタッフである金子和行さんです。この流体テクノセンターからは、イオン交換水（純水）、窒素ガス、液体窒素、液体ヘリウムといったさまざまなガスや液体が生研全体に供給されています。こうした流体は現在25研究室以上が利用しており、ある意味で生研の「心臓」となっていると言えます。先端研にも供給可能とのことですが、問題は構内の運搬方法と、例えば液体ヘリウムは高価で有限な資源のため、必ず回収してリサイクルすることが必要となっており、その回収が確実に行われることが必要だそうです。

金子さんは、物性研の液化室に10数年いた寒剤の大ベテランです。そんな金子さんでも、機器の運転管理から供給システムの開発、さらに危険物を扱うため法律への対応やさまざまな事務処理など、通常3～4人のスタッフで行うところをたった一人でやらねばなりません。しかも危険物を扱うために休むこともままならないため、非常に大変なようです。

その一方で、何を隠そう昼休みのサッカーでは「師匠」的存在で、筆者も青山公園時代から大変お世話になっています。誰でも受け入れる温かさを持つ一方で、厳しさと頼もしさを兼ね備え、生研の「心臓」を任せるにはまさにうってつけの人だと言えるでしょう。
(鈴木高宏)

CAMPUS GUIDE

ハードもソフトも New Campus

新キャンパスへの移転が完了して早や半年が経ちましたが、新しい建物の住み心地はいかがでしょう。

「ハード」(建物)が新しくなった一方で、「ソフト」の面でもこの秋から生研は新しく生まれ変わります。電子化推進企画部会では、この度、生研の Web サイト (ホームページ) の環境を、より効率的な情報収集・発信、さらには4月よりの事務機構改革に対応しての事務手続きの効率化・省力化に貢献するさまざまな工夫を施しました。

例えば、所外向けにはトップページに検索エンジンを加えたほか、大部門化に伴い分かりにくくなった本郷における大学院専攻との対応を分かりやすい表にまとめ、さまざまなニーズに対応できるサイト構成を実現しました。

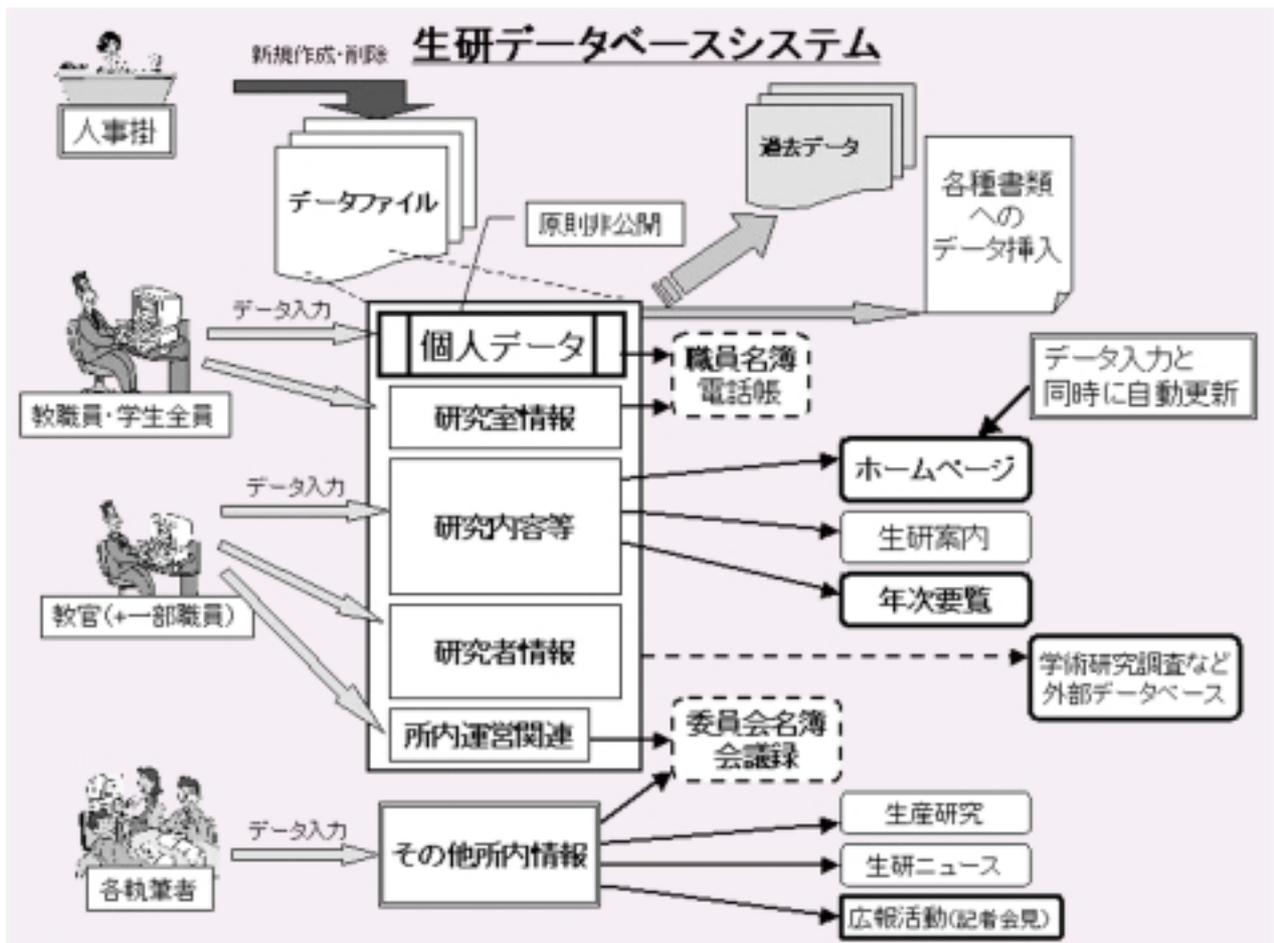
また所内向けには、これまでの所内向けページを整理すると同時に、初めて生研に来られた方でも分かりやすいように、目的に応じて必要な事務手続きが一目で分かる「生研ヘルプ」や、名前しか知らない人でも生研の構成メンバーなら一発検索できる「Searching in IIS」など「痒い所に手が届く」ページを新たに

作成しました。

そして、これらを実現するために最も重要な鍵となるのが「生研データベースシステム」です。これは「生研案内」や「年次要覧」等のさまざまな出版物に利用されるデータ収集を行うだけでなく、それらを更に他のさまざまな用途にも利用できるようにしたものです。図をご覧くださいますと職員名簿・学生名簿作成のための個人情報という項目が目につくでしょうが、こうした情報は公開/非公開が選べるようになっていましたし、また入力されたデータは基本的に管理者を除いては閲覧できないようになっています。むしろ、こうした情報を利用するのは入力したユーザの皆様自身でして、ここに一元化されたデータを元に、さまざまな事務手続きや申請書類などへの記入を効率化するのが最大の目的です。

なお、公開当初においてはまだ不十分な点が多々ありますが、それらについては皆様からのご意見に従って、少しずつより良いものにしていく予定です。詳しくは、別途説明会等を行ってまいりますので、皆様のご協力を是非よろしくお願い致します。

(情報・システム部門 鈴木 高宏)



■材料界面マイクロ工学研究センター

材料界面マイクロ工学研究センターは、物質の界面等を利用するソフトな材料創成プロセスおよびこれに関連する加工・計測評価技術についての研究を行うセンターとして1995年4月に設立されました。これまでにエネルギー関連材料、電子機器材料、光関連材料、社会基盤材料などについて、「新しい材料をつくる」、「新しい評価・解析」、「新しい材料利用分野」を融合させた材料研究・開発の方法を開拓してきました。現在、以下の4研究室で研究開発が進められています。

香川研究室では、セラミックス繊維やガラス繊維で強化した金属、ガラスなどの繊維強化型複合材料について、強くかつしなやかで割れにくい材料の創製や、界面での破壊現象の解明を行っています。朱研究室では、繊維強化セラミックスや粒子強化金属などの複合材料および耐熱コーティングについて、外から力を長時間または繰り返して加えたときの強度低下（疲労）や変形（クリープ）がどのように起こるかを電子顕微鏡で実際に

観察しながら、その界面の損傷機構を調べています。酒井（啓）研究室では、液晶やゲル、高分子・生体系といったソフトマテリアルの界面での分子レベルの物性や、微粒子などが存在する溶液など不均質な媒質中の構造について、光散乱や表面波を用いた新しい分析手法の開発やそれによる物性・構造の解明を進めています。

宮山研究室では、わずかなエネルギーで電気信号の変換・記録を行う強誘電体などの材料について研究を行っています。強誘電体は、電圧をゼロにしても蓄えた電荷を保つ能力を持つため、電源を切っても記録情報が失われない不揮発性メモリーとして利用できます（図1参照）。低消費電力で高速・高回数の書き換えができるため、究極のメモリーとして期待されています。現在その材料としてビスマス層状構造強誘電体が注目を浴びています。その結晶は絶縁性酸化ビスマス層を介して強誘電性を発現する層が積層した構造をとるため、その層構造を

変えると特性も大きく変わります。つまり単結晶であってもそれを構成する層の間の界面が全体の特性を左右しているといえます。これまでに、さまざまなこの構造の材料を作製し、どのような結晶構造が望まれる物性の発現に有効か調べてきました。また、結晶中の欠陥を制御すると、多結晶体でも単結晶に匹敵するほどに大きな残留分極値（電圧0のときの残留電荷）や、非常に小さな抗電界（分極方向を反転させる電界）が得られることがわかりました。最近では、2種類の強誘電層が交互に配列した交代層構造体の単結晶の育成に成功しています（図2参照）。この構造では、1つの層に導電性を与えることにより、結晶構造中に各種の電子デバイスを形成できる可能性を持っています。強誘電体メモリーの超高密度での形成や、強誘電性／半導性の相互作用を活かした新しい機能の創製を目指した研究を進めています。

（材料界面マイクロ工学研究センター
宮山 勝）

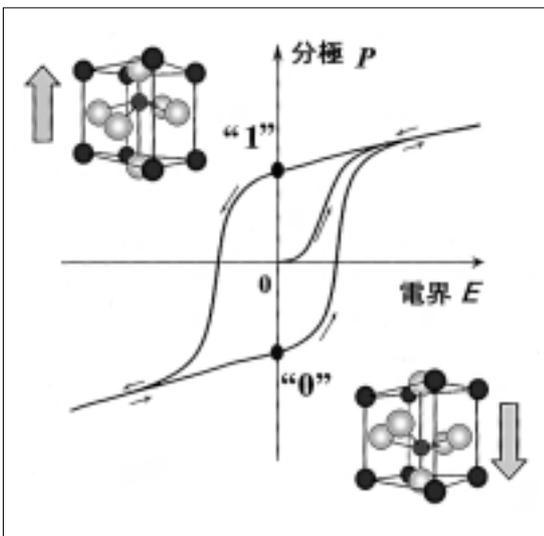


図1 強誘電体の分極特性

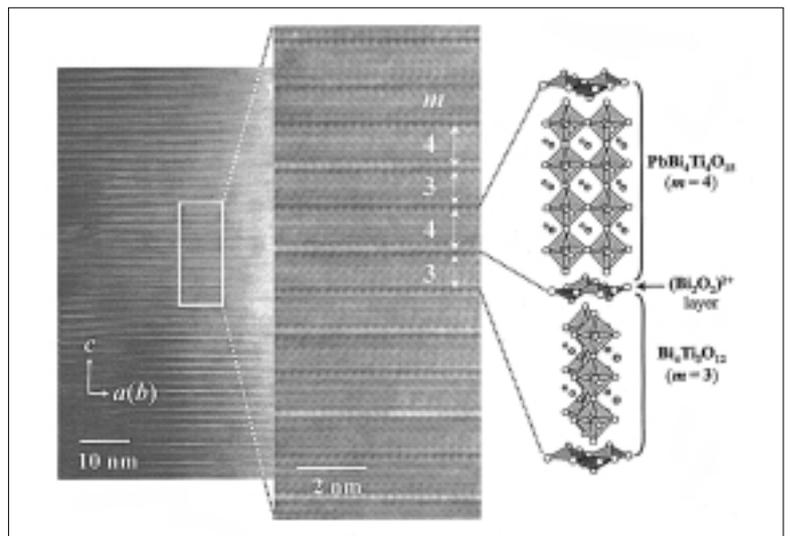


図2 ビスマス交代層構造強誘電体の格子像と結晶構造

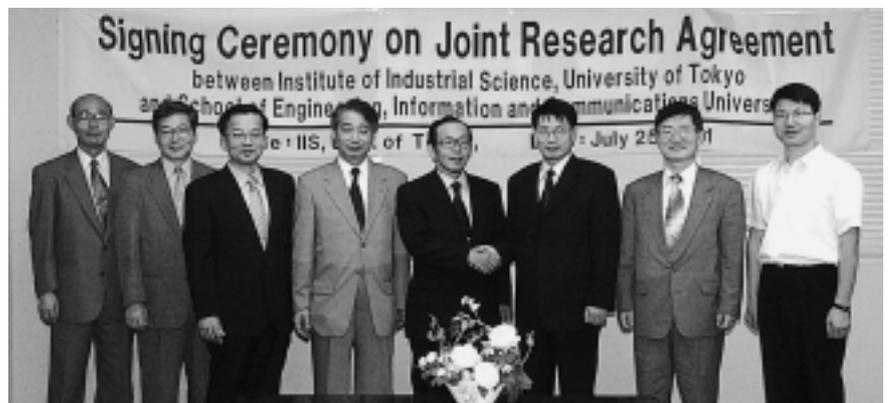
情報通信大学(ICU)(韓国)との 共同研究交流推進協約書の締結について

今年1月のIT基本法の施行に見られるように、わが国でも高度なネットワーク社会形成に向けて情報通信技術の重要性が認識されるようになってきました。しかし、韓国政府は、この点に関し一歩先んじています。1967年に創立されたICUもそのひとつの現れと言えるでしょう。ICUは私立大学ですが、本年5月、情報通信省長官とICU学長とが入れ替わるなど、情報通信省と密接な関わりを持つ大学院大学です。ICUはまた産業界とも密接な協力体制を持ち、教官一人当たりの研究費は韓国最高で40万米ドルになるとのことです。

ネットワーク社会を高度化していく上で、情報セキュリティ技術は、その死命

を制するものといっても過言ではありません。ICUでは、国際暗号研究会理事を務める金光兆教授を中心に、情報セキュリティ研究を強力に推進しています。最近、情報セキュリティ国際研究センター(IRIS)も設置されました。

本協約は情報セキュリティ分野を中心として、本所とICUとの研究交流を深めるために締結されたものです。7月25日にICUの工学研究科長と金IRIS所長とが来所し、写真のような調印式を行いました。(情報・システム部門 今井秀樹)



生研記者会見報告

いつも見ている手近な物や現象でも解析が非常に困難なものがある。その一例が、「布」の変形であろう。衣料用材料

やテントなどの居住用として、古くから親しまれている布は、人工血管や人工靱帯などの生体用や宇宙航空機用の材料と

しても使われるようになってきている。しかし、素材の糸を要素として数値解析するには、糸の数があまりにも多すぎて、現実的にはできないといってよい。吉川研究室では、うねり係数という概念を導入して、布材料独特の局所的な変形様式を的確に表現する手法を開発し、その内容が7月11日に記者発表された。吉川暢宏助教授は、この手法で糸の絡み合いに起因する複雑な変形を簡単に解析できるので、次は実際の布構造物設計へと適用していきたい、と語った。

(海中工学研究センター 浦 環)



■ 所内レクリエーション大会

ここ2年間、駒場と六本木という分散された研究環境から十分にできなかった弥生会主催のレクリエーション大会が、今年、駒場リサーチキャンパスで開催された。弥生会は教職員、学生をはじめ研究所内すべての人達の参加によってより親睦を高めようとの目的があり、競技には留学生も多数参加した。

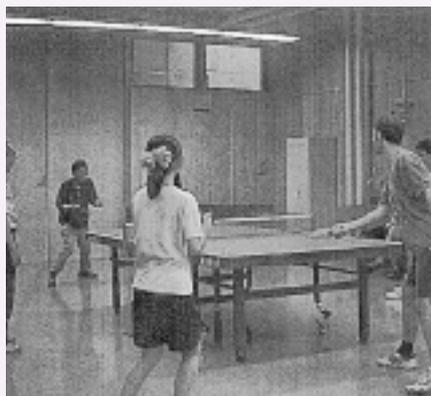
また、今年は駒場リサーチキャンパス

内の他研究施設からの参加もあり、キャンパス内の友好がはかられた。

競技は従来からの卓球、将棋に加えて新しくミニサッカーとキャンパス内5周マラソンが取り入れられた。ミニサッカーは所属部内予選を行うなどの盛り上がりを見せた。競技最終日の夕方には、キャンパス内5周マラソンが行われ、41名の男女が日頃の健脚を競った。競技終了

後には、男女それぞれ上位3人の表彰とレクリエーション全体の総合成績が吉識弥生会副会長から発表された。表彰式後の親睦会には約200名が参加し、より一層の友好がはかられた。なお、総合成績結果は、一位第1部、二位第3部、三位第5部・事務部、五位第4部・共通、七位第2部であった。

(電子計算機室 原 健蔵)



VISITS

● 生研訪問者

6月27日(水)

ブラジル連邦共和国・サンパウロ州工業連盟技術部会長
Dr. J. A. Correa 氏

7月25日(水)

大韓民国・韓国情報通信大学院大学工学部長
李 榮熙教授 他2名

PERSONNEL

●人事異動

発令年月日	氏名	異動事項	新官職(所属)	旧官職(所属)
13. 6.30	小林 剣二	辞職		技官(物質・生命部門)
13. 7. 1	立間 徹	配置換	助教授(情報・システム部門)	助教授(大学院工学系研究科)
13. 7. 1	室野 剛隆	採用	客員助教授(高次協調モデリング)	
13. 8. 1	高崎 純子	配置換	経理課経理第二掛	総務課研究総務掛
13. 8. 1	栗原 裕光	配置換	総務課庶務掛	経理課経理第二掛

●新任のご挨拶

情報・システム部門 助教授
立間 徹



7月1日より情報・システム部門に加えていただきました。院生時代を六本木で過ごし、東京農工大助手、東大工学系研究科講師・助教授を経て、生研に戻って参りました。専門は電気化学で、医療・食品・環境計測への応用をめざしたバイオセンサー、環境に応じて機能や性質を変える電気化学触媒、光エネルギーを貯蔵して夜間にも機能を維持する光触媒など、新しい電気化学・光電気化学デバイスの研究・開発を行っています。横のつながりが強く、気負いすぎないという生研の特徴が今も続いていることを嬉しく思っております。今後ともよろしく願い申し上げます。

高次協調モデリング 客員助教授
室野 剛隆



はじめまして。平成13年7月1日付で、高次協調モデリング客員部門の助教授として、小長井研究室でお世話になることになりました。私は現在、鉄道総合技術研究所に勤務しており、鉄道構造物の耐震設計・地震防災に係わる研究を専門としております。就任から2ヶ月余りですが、研究室での小長井教授をはじめとするスタッフの方々との議論は、新鮮かつ魅力的で、いつも興奮させられます。また、自分の研究スタイルを見直す機会にもなると思います。在任中は、断層変形と構造物の設計、地盤と基礎の動的相互作用の問題に取り組むとともに、この研究成果を設計現場に活かすシナリオ作りをしたいと思っております。今後とも宜しく願いいたします。

AWARDS

学生部門

所属	職・氏名	受賞名・機関	受賞項目	受賞日
情報・システム部門 (柴崎研究室)	博士研究員、学術振興会・外国人特別研究員 趙卉菁 (Huijing ZHAO)	測量技術奨励賞 日本測量協会	レンジ画像による3次元都市空間データの自動計測方法に関するシミュレーション	2000. 5.30
物質・生命部門 (平川研究室)	大学院生 阿部 真理	第10回(2001年春季)「講演奨励賞」 応用物理学会	時間分解THz分光法を用いたGaAs中の速度オーバーシュートの評価	2001. 5.11
情報・システム部門 (柴崎研究室)	博士研究員、学術振興会・外国人特別研究員 趙卉菁 (Huijing ZHAO)	学会奨励賞 日本写真測量学会	地上据え置き型レーザレンジスキャナーを利用した3次元都市空間データの自動構築手法に関する研究	2001. 5.31
人間・社会部門 (沖研究室)	大学院生 芳村 圭	優秀ポスター賞 水分・水資源学会	降水・蒸発過程が水の安定同位体比変動に与える影響について	2001. 8. 2

INFORMATION

生研セミナー

主催 (財)生産技術研究奨励会
協力 東京大学生産技術研究所

●最近の大地震で得られた教訓と新しい耐震技術
東京大学生産技術研究所 教授 藤田隆史 他 8 名
平成13年11月8日(木) 10:00~17:30
平成13年11月9日(金) 10:00~16:00の間随時
定員60名
受講料 賛助員5,000円 一般10,000円

●場 所

第1日目

東京都目黒区駒場 4-6-1

東京大学生産技術研究所 第3会議室

第2日目

千葉県千葉市稲毛区弥生町 1-8

東京大学生産技術研究所 千葉実験所

生研基礎講座

主催 (財)生産技術研究奨励会
協力 東京大学生産技術研究所

●金属素形材の創形創質加工
東京大学名誉教授 木内学 他 1 名
平成13年11月9日(金)から10日(土)
平成13年12月21日(金)から22日(土)
平成14年1月18日(金)から19日(土)
平成14年2月15日(金)から16日(土)
平成14年3月15日(金)から16日(土)
10:00から16:20まで
定員30名
受講料 賛助員48,000円 一般96,000円

●場 所

東京都目黒区駒場 4-6-1

東京大学生産技術研究所 第4会議室

詳しい案内はホームページをご覧ください。
パンフレットをご希望の場合は部数、送付先等ご連絡
ください。

*生研セミナー・生研基礎講座申込み・問合せ先
東京大学生産技術研究所内 (財)生産技術研究奨励会
TEL: 03-5452-6093
FAX: 03-5452-6096
E-mail: renmae@iis.u-tokyo.ac.jp
<http://www.iis.u-tokyo.ac.jp/shourei/>

千葉実験所公開

本所千葉実験所は、駒場キャンパスでは実施が難しい大規模な実験研究やフィールドテストなどのための本所の付属施設です。今年は新たに張力型空間構造モデルドーム観測システム(ホワイト・ライノ)が施設に加わり、また海洋・沿岸モニタリング実験棟(仮称)が年度内完成を予定に工事を行っているなど、近年とみにその利用が活発になっています。今年は、隔年で実施されています千葉実験所

公開を下記の要領で行いますので、是非この機会にご覧ください。(千葉実験所管理運営委員会・広報WG)

●日時:平成13年11月9日(金)午前10時~午後4時

●場所:東京大学生産技術研究所 千葉実験所

〒263-0022 千葉県稲毛区弥生町 1-8

JR 総武線西千葉駅下車 北口から約250m

公開予定テーマ

・高品質吹付けコンクリートの開発 魚本研究室
・コンクリート構造物の各種非破壊検査 魚本研究室
・スチール・スウィングによる柱の振動実験 大井研究室
・鉄骨接合部の高速載荷実験 大井研究室
・多層骨組のハイブリッド設計点探索 大井研究室
・補強土壁工法の実物大模型実験 古関研究室
・ゼロエミッションのための物質変換技術の開発 迫田研究室
・車両の運動力学とアクティブ制御の展開 須田研究室
・快適性の工学的評価 須田研究室
・偏心を有する構造物の地震時応答 中埜研究室
・ニューラルネットワークによる履歴推定を利用したサブストラクチャ地震応答実験 中埜研究室
・張力型空間構造の構造性能と建設に関する研究 藤井研究室、川口研究室
・スマート構造による建築構造物の振動制御 藤田(隆)研究室

・リモートセンシングによる海洋観測 林(昌)研究室
・海洋構造物挙動計測 藤野研究室(新領域)、林(昌)研究室
・マイクロ波リモートセンシングによる表層土壌水分量の推定
一散乱モデル適用のためのフィールド実験一 虫明研究室、沖研究室
・都市流域の水循環過程の解明と水環境の保全 虫明研究室、沖研究室
・地震が引き起こす様々な動的非線形挙動をシミュレーション
する一断層破壊から家具の転倒挙動まで一 目黒研究室
・千葉実験所における新設地震観測システム 山崎研究室
・プラスチック成形現象の高次解析 横井研究室
・円管内旋回乱流のX型熱線による三次元計測 吉識研究室、加藤(千)研究室
・二次元翼周りの流れの非定常データ計測 吉識研究室、加藤(千)研究室

生産技術研究所新研究棟竣工記念式典の開催について

本所の新研究棟竣工および移転が完了し、はや半年が経過しました。そこで、新研究棟の建設に際しご尽力、ご協力いただいたことへの感謝の意を込めて、文部科学省研究振興局長、文教施設部長、佐々木東京大学総長をはじめ学内外の関係者の方々をご招待し、来る10月10日(水)14時

から記念式典を催すこととなりましたのでご案内いたします。

記念式典 14時00分から14時30分 B棟7階第1会議室

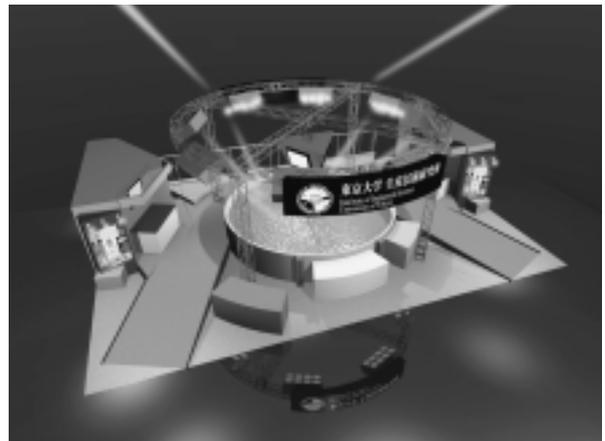
施設見学 14時30分から15時15分

ロボフェスタ神奈川ー生研のロボット技術を出展

2001年11月16日から25日にかけて、パシフィコ横浜で開催される「ロボフェスタ神奈川」(主催:ロボフェスタ神奈川2001実行委員会)の展示会に、生研からもブースを出展します。このイベントは、8月から11月にかけて横須賀、川崎、相模原、横浜の4つの会場において、連続して開催されるもので、横浜での展示会が最も大規模なものとなります。近年、ロボット技術への期待がますます高まる中で、国内の主要な研究機関や企業が多数参加し、「ロボットたちと生きる明日」をテーマに、最先端のロボット技術を分かりやすく説明しようというものです。生研では、神奈川県からの強い要請もあって、ロボフェスタへの出展準備を進めております。研究所におけるロボット研究を来場者に直接見てもらうことを重視して、実際に研究に使用しているロボットを現場へ持ち込み、デモンストレーションを中心とした展示を展開する予定です。ゆめテクに引き

続き、是非みなさまご家族連れだっって「生研ブース」へお越しくださいますようお願いいたします。

(海中工学研究センター 藤井輝夫)



生研ブースのイメージ

CIRMM/CNRS Networking Forum

マイクロメカトロニクス国際研究センター ネットワークフォーラム ーフランスにおけるマイクロ・ナノシステム研究の現状と研究者交流ー

生研マイクロメカトロニクス国際研究センター(CIRMM)では、フランス科学技術庁(CNRS)と共同研究を行っています。本フォーラムは、フランスにおけるマ

イクロ・ナノシステムの研究状況を紹介し、日本の研究者、大学院生がフランスで研究する機会を積極的にサポートしようというものです。是非ご参加ください。

- 主催: 生研マイクロメカトロニクス国際研究センター
- 日時: 平成13年11月20日(火) 13:00~15:00
- 場所: 東京都目黒区駒場4-6-1
東京大学生産技術研究所第1会議室(Bw701)

- 連絡先: 参加を希望される方は下記までお知らせください。
藤田博之(TEL: 03-5452-6248、
E-mail: hisyo@fujita3.iis.u-tokyo.ac.jp)
<http://www.cirimm.iis.u-tokyo.ac.jp/>

第10回技術官等による技術発表会

生研の技術官が中心になって企画する技術発表会は、技術官等の研究支援業務、研究業務の成果を発信・議論する場として着実に定着し、今年でちょうど10回目を迎えます。今回もまた、技術官等の地味ではあるが堅実な日頃の活動ぶりとその成果が発表されると思いますので、ご来聴下さいますようご案内申し上げます。

●日 時：10月16日(火) 午前10時～午後5時
 ●場 所：本所 第1会議室
 問合せ先：技術発表会実行委員会 岡田和三
 E-mail : kokada@iis.u-tokyo.ac.jp
 (発表会終了後に懇親会を予定しています)

PLAZA



トウモロコシ畑と湖と大学

海中工学研究センター 助教授
 藤井 輝夫

朝、心地よい鳥のさえずりで目が覚める。シリアルに牛乳をかけたものをかきこんでから、自転車にまたがり、丘を下って小川を渡ると、広々としたトウモロコシ畑。

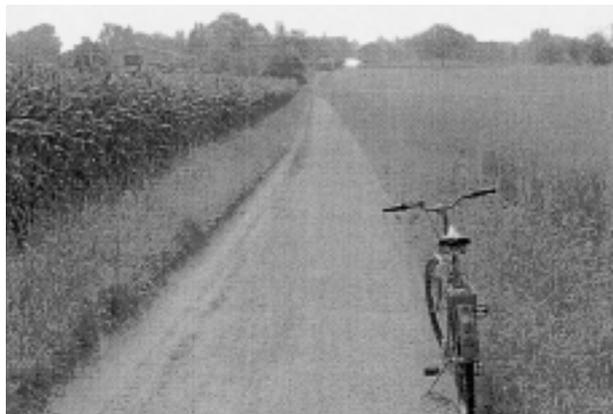
部屋から大学まで自転車で約25分、ここが最も気持ちのいい場所で、つつい自転車を止めて道草をしてしまう。

スイス連邦工科大学ローザンヌ校 (EPFL : Ecole Polytechnique Federale de Lausanne) は、ローザンヌ郊外のレマン湖のほとりにある。この International Relation Office の招聘により、2001年7月に1ヶ月間滞在する機会を得た。受け入れ教官は以前、生研の客員助教授をされていたプロイレル先生 (Prof. Hannes Bleuler) で、先生の所属するマイクロエンジニアリング学科にオフィスを用意していただいた。今回の滞在目的は、昨年来議論を進めてきた生研と EPFL のマイクロエンジニアリング学科との研究交流推進確認書の締結準備作業を行うこと、これに加えて EPFL に限らずスイス国内のマイクロテクノ

ロジーに関連する研究機関を見て回り、共同研究の可能性を探ること、などであった。

スイスは人口が数百万、国土の面積は日本の九州程度であるが、国際的に見てもユニークでレベルの高い研究が行われている。その理由は、オリジナルなアイデアを大事にして息の長い研究を続けること、また、多数の研究スタッフをスイス国内にかぎらず諸外国から受け入れ、研究者の国際的な流動性を保っていることにある。たとえば EPFL では、教授の人数に対して10倍以上の人数の研究スタッフ (ここでは博士課程の学生も含まれる) が研究費で雇用され、それぞれ独立した研究者として扱われている。こうした研究活動における「独自性と流動性」のバランスの良さは、一つにはこの国の成り立ちそのものにも深く関係していると思われる。

トウモロコシ畑の丘や湖に囲まれた大学に、世界中から研究を志す者が集まり、思い思いに議論をしてゆく中で、息の長い、EPFL ならではの研究が生み出される。都市型研究所である生研とは環境がだいぶ異なるが、研究所として国際的に開かれかつユニークな存在でありつづけるために、見習うべき点もあるのではなからうか。建国記念日にレマン湖畔の町より打ち上げられる花火を、湖上のボートから眺めつつ、生研における今後の研究活動への思いを新たにして帰国の途についた。





より自然なマン・マシン インターフェースの実現に向けて

附属概念情報工学研究センター 佐藤洋一

計算機の急速な高性能化とネットワークの高速化にともない、高速ネットワークにより接続された計算機が実空間のあらゆる部分に存在するユビキタス・コンピューティング環境が現実のものとなりつつあります。このような背景のもと、我々の研究室では、ユビキタス・コンピューティング環境において自然なマン・マシン・インターフェースを実現するために必要とされるのは何か、またそれをどのようにして実現していくかという観点から研究を進めています。これまでのマン・マシン・インターフェースでは、キーボードやマウスといった入力デバイスを用いて明示的に行う操作を基本として設計されていたのに対し、ユビキタス・コンピューティング環境では、ユーザがどのような状況において何をしているのかということシステム側が知覚することにより、ユーザにとって適切な情報を適切なタイミングで分かりやすく呈示するといったことが重要になってきます。このためには、決められた入力コマンドなどのいわば言語的な情報だけではなく、人間の自然な身振り・手振り・表情などといった非言語的な情報をも手がかりとして、人間の行動やその意図を推測していくことが必要となります。我々の研究室では、このようにシステムにさまざまな知覚機能を実現することにより、自然なインタラクションを可能とすることを目指し、ユーザの両手指先位置の実時間追跡にもとづくジェスチャ認識や、ステレオカメラ装置を用いた視線方向計測などに関する研究を進めています。また、人間動作の認識技術に物体認識技術を組み合わせることにより、実在物体と電子情報とを連携させながらインタラクティブに操作することを可能とする拡張机型インターフェース EnhancedDesk とそれに基づくアプリケーションを提案しています。今年の8月には米国ロサンゼルス市で開催されたコンピュータグラフィックスに関する最大の国際会議 ACM SIGGRAPH2001 (28th

International Conference on Computer Graphics and Interactive Technique) においてこのシステムを紹介する機会を得ることができ、2000人を超える方々に実際に体験してもらいました。その際にマン・マシン・インターフェースやコンピュータグラフィックスの分野のみならず、教育やインタラクティブ・アートなど幅広い分野の人からもさまざまな意見を得ることができたのは貴重な経験でした。マン・マシン・インターフェースに関する研究では人間を対象とするがゆえに困難な課題をいくつも解決していくことが求められますが、人間にとってより自然なインタラクションの実現をめざし研究を進めていきたいと考えています。



編集後記

表紙のインタビューの際に聞いたところ、流体テクノセンターは寒剤委員会の下にあるので、経理上は平川寒剤委員長の下に第3部に所属しているとのこと。F棟が建つまでの間、その準備の一方で施設掛を手伝わっていたので、筆者は事務組織の一部だと思っていたのです。そういう話をし

ていたところ、カメラマンの倉科さんが映像技術室も同じだ、と。確かに、今議論されている技術官問題にもあるように、試作・電算も含め、こうした共通施設の位置付けがどうも不明確なままです。また、個々の規模が小さいために後進の育成がままならず、近い将来にもこうした共通施設の

存続が危くなる恐れがあります。

研究室、事務組織に加え、こうした共通施設の存在にも目を向ける必要を強く感じました。

(鈴木高宏)